

計画演習 I

2. 21世紀の公共性とは?

[担当教員]

城戸崎和佐 (京都造形芸術大学教授)

大谷弘明 (日建設計) 近井務 (大林組)

[Teaching Assistant]

加藤美悠 (A62) 小林璃央 (A62) 中村未明 (A62)

開講年次: 学部3回生後期

[OBゲスト講評者]

佐藤達保 (AC9、竹中工務店)

■課題主旨

21世紀の公共空間を「メディア」をキーワードに構築する。ここでは、メディアを情報媒体と考える。昔からある書籍や新聞などの活字媒体はその代表であるし、音楽CDや映像DVDも情報媒体である。TVやラジオなどの放送も、インターネットも然りである。ファッションやプロダクト、建築などのデザインやアートも、演劇や音楽などのパフォーマンスも、飲食や都市、人までもメディアと考えができる。

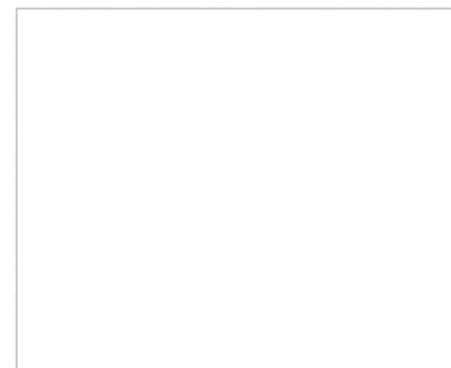
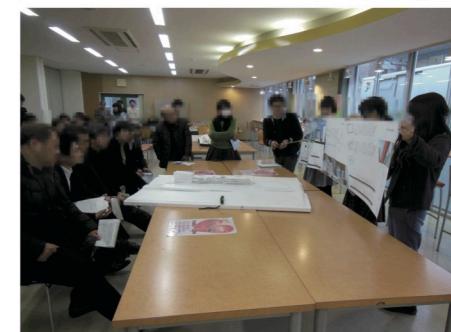
20世紀までのメディアはほとんどが活字媒体で「知の殿堂」たる公共図書館や大学図書館に蓄積され、取り出し利用することが容易ではなかった。メディアの種類が増え、自宅にいながらメディアへのアクセスが容易になった現在、メディアを内包する空間には、あえてその場にいなければ得られない美的体験や、ファンタジーナブルで居心地のよい非日常、人と人の交流から生まれる情報共有が求められている。六甲駅から日常空間の改札を出た瞬間から始まる、21世紀の公共空間を提案してほしい。

■概要

敷地は阪急六甲駅改札の外(ラチ)から近隣の街区の一部を含む(別添地図参照)。そこに、書籍、音楽、映像、アート、演劇等を鑑賞、体験、または購入できる空間を組み合わせて設計し、また、これからの知的活動を発信するアーティストやクリエイターが長期滞在できるアパートメントホテルを持つ、複合施設を考える。建築は3階以上とする。一体型で分棟形式でもかまわない。魅力的な外部空間を持ち、歩車動線についても提案すること。

■計画対象条件

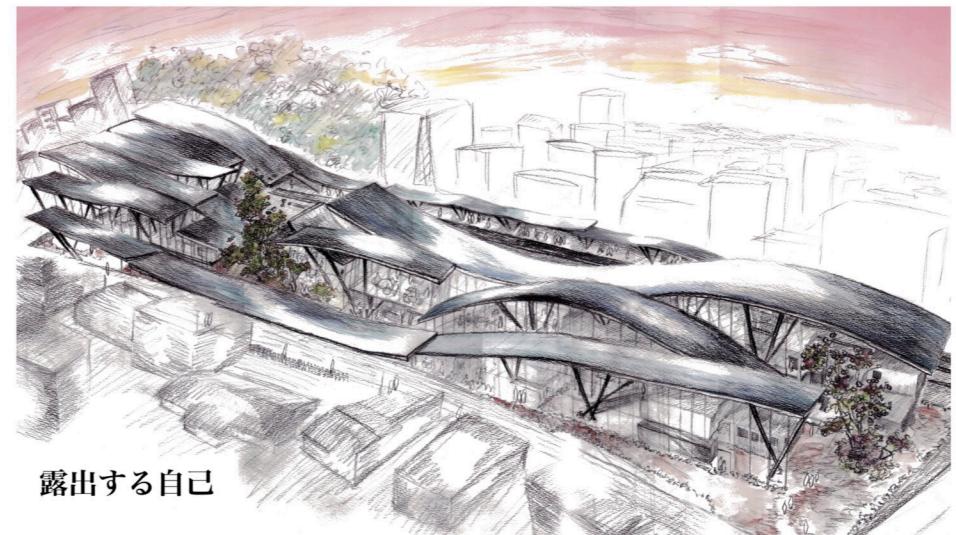
- 1.ホール: 平土間のホール。可動客席200程度。演劇、講演会、イベント使用を想定する。
- 2.本屋: コンシェルジュ制で各コーナーが充実した書店。試し読みができる椅子や買った本を読むカフェ、バーなどを周囲につくること。
- 3.映像DVD、音楽CDショップ: コンシェルジュ制で各コーナーが充実したショップ。レンタルあり。試聴コーナーを設け、関連書籍の展開やイベントのホール利用など、上記1や2のスペースとの連動も考慮する。
- 4.アーキャリー: ワークショップができる空間とする。
- 5.サテライトオフィス: FMデジオ局
- 6.アパートメントホテル: ダブル(30m²程度)リビング付ツイン(100m²程度)計10室以上。
- 7.地上階のバス乗り場、タクシー乗り場を整備する。
- 8.その他: 物販、飲食などの提案は自由。
- 9.延面積は8,000m²前後とする。



露出する自己

馬場智美

波打つ屋根の連續に覆われた空間の中で、昨今顕在化する人々の「自分の何気ない日常を露出したい」という欲求を刺激する公共空間。斜めに生えた柱と屋根により変化が生まれ、自然な見る見られる関係ができる。



露出する自己

重層する都市の知

堀内啓佑

回遊するセミナーハウスと公園の丘。敷地である公園に、「private」「common」「public」の3つのスペースの交わり方を考える。3つのスペースが滑らかに繋がり、屋根の上が丘となり、人々が回遊する空間が、ここに生まれる。



iPhone Station

塙越仁貴

ユビキタス社会に相応しい「知の殿堂」を、iPhone をヒントに構築する。日々の日常のあらゆる場面を「アプリケーション」と捉える。日常生活のホーム画面から自由にアプリケーションを選択、移動する。

■ メディアの変遷・モバイル化と新たな『知の殿堂』

かつて複数などの情報源として、公共空間者は「知の殿堂」としての役割を担ってきた。その後、テレビやラジオ、そしてインターネットへの普及によって、一朝一夕性の消滅し複数個になつたものの、スマートフォンの普及がユビキタス社会に出でることに成功した。これを「知の殿堂」の構造に対する考え方、世界に繋がるメディアをパブリックなユビキタス社会に、それらの技術を最大限に活かし我々の生活を豊かにする、21世紀における新たな「知の殿堂」を提案する。



滲みの領域

谷大蔵

現代ではインターネットを介することで人の往来までもがメディアとして捉えられる。この空間では立体的に交錯することで見る見られるの関係により、受信者としてではなく自らが他へ発信するメディアの一部であると認識される。

